



京都大学 総合人間学部 広報

特集

今号は、昨年9月に開催された同窓会主催による総人・人環同窓会フォーラムの特集記事を掲載します。

第1回 総人・人環同窓会フォーラム「卒業生が語る総人・人環の活かし方」

第一部 講演会

「大学での『学び』をどう活かすのか?～総人/人環の過去・現在・未来～」より

| | |
|-------------------------------|----|
| プログラム | 2 |
| 御挨拶..... 安部 浩 | 3 |
| 第1回総人・人環同窓会フォーラムの趣旨 | 4 |
| 「総人」という壮大な社会実験を成功させるために | 6 |
| 自由な学びの場としての「総人」を活かせ | 8 |
| 「何でもあり!」が面白い | 10 |
| 同窓会フォーラムを終えて | 13 |
| 閉会の挨拶..... 富田 博之 | 14 |

2006年9月30日
第1回 総人・人環同窓会フォーラム
「卒業生が語る総人・人環の活かし方」
(人間・環境学研究科棟地下大講義室)

開会の挨拶

●安部 浩

平成6年度人間・環境学研究科修士課程修了
平成10年度人間・環境学研究科博士後期課程指導認定退学
平成11年5月 京都大学博士(人間・環境学)
(総人・人環同窓会会長/人間・環境学研究科准教授)

フォーラムの趣旨説明

●植村哲士

平成10年度総合人間学部人間学科卒業
平成12年度人間・環境学研究科修士課程修了
(株式会社野村総合研究所勤務)

第1部 講演会

「大学での『学び』をどう活かすのか?～総人/人環の過去・現在・未来～」

●木南陽介

平成9年度総合人間学部人間学科卒業
(株式会社リサイクルワン代表取締役)

●城井 崇

平成9年度総合人間学部人間学科卒業
(民主党・前衆議院議員)

●村上正行

平成8年度総合人間学部基礎科学科卒業
平成10年度人間・環境学研究科修士課程修了
平成13年度京都大学大学院情報学研究科博士後期課程指導認定退学
平成17年9月 京都大学博士(情報学)
(京都外国語大学マルチメディア教育研究センター専任講師)

第1部まとめ

●植村哲士

(株式会社野村総合研究所勤務)

第2部 パネルディスカッション

「総人・人環ネットワークの将来構想～同窓会をどう機能させるのか～」

閉会の挨拶

●富田博之

(総合人間学部長・人間・環境学研究科長)

特集

第1回 総人・人環同窓会フォーラム「卒業生が語る総人・人環の活かし方」

第一部講演会

「大学での『学び』をどう活かすのか? ～総人／人環の過去・現在・未来～」より

御挨拶

総人・人環同窓会会長 安部 浩



総人・人環同窓会の会長を務めさせて頂いております安部と申します。

「卒業生が語る人環・総人の活かし方」は、設立総会を除いては本同窓会の手になる最初の催しですが、多くの方々からの御力添えを賜りました御陰で、無事開催することが出来ました。

まず初めに、当日は土曜日で休みの日であったにも拘わりませず、足を御運び頂き、最後まで熱心に討議へ御参加して下さいました皆様に対して厚く御礼を申し上げたいと存じます。

企画の立案や人選等を初めとして、当日は見事な趣旨説明と司会進行を務めて下さった植村さん。そしてそれぞれの御活躍の分野から興味深い話題の提供と啓発的な問題提起を賜った木南さん、城井さん、村上さん。こうした人環・総人OBの方々の多大な御尽力なくしては、今回の催しは実現されませんでした。御多用中、どうも有難うございました。

また — 内輪褒めとなりますので、些か気が引けるのですけれども — 今回の開催に際しまして、学部生の皆さんを初めとする同窓会事務局の人達には、実に様々な点で助けて頂きました。この場

をお借りして一言謝意を申し述べさせて頂く次第です。

「総人（および人環）における学生生活を今後の進路において、どのように活かしていけばよいか」という御自身の問題のみならず、「一層厳しさを増していく世情の中、総人や人環をこれからも活力に満ちた研究・教育機関として「活かし」ていくにはどうしたらよいか」といった、我等が学部・研究科全体の課題を御考えになる上で、この度の催しが皆様にとりまして御一助になれば、私達事務局員としては、これ程嬉しいことはございません。

最後に事務的な連絡を一点。本年6月16日（土曜日）の午後、京都大学百周年時計台記念館の二階において第二回の総会及び大会を開催する予定です。詳細は追って御連絡致しますが、今から御心づもりをして頂けると幸いです。

総人・人環同窓会 URL:

<http://www.h.kyoto-u.ac.jp/dousoukai/>

大学院人間・環境学研究科准教授

(あべ ひろし)

第1回総人・人環同窓会フォーラムの趣旨

植村 哲士



それでは第一部を始めさせていただきます。私は総合人間学部の3期生の植村です。1999年に卒業し、人間・環境学研究科の第二専攻に進んだあと、今は野村総合研究所の方で働いております。

本日どうしてこのような話にいたったかの経緯をお話しますと、昨年の12月、同窓会の設立総会があるとの案内を頂きまして顔を出してみたのですが、設立の経緯についていろいろ話を聞いてみると、どうやら大学側に「作って頂いた」というニュアンスだったわけです。

そのとき、同期の松村君と話をしまして、総人のようにいろいろな分野の人が集まれば何か面白いことが出来そうだと、せっかく同窓会が出来たのだからしっかり活用しようじゃないか、ということになったわけです。しかし、昨年度の時点では活用の方向性についてはまったくの白紙で、「同窓会をこれからどうやっていきましょう?」、というのが正直なところでした。ただ、名簿管理だけでは勿体ない。そこで現役生の状況も含めて更に話を聞いてみますと、総人も人環も後輩の人に、勉強法について迷っている方が多いという話が出てきました。

私は3期生で、今日お話頂く方も1期生・2期生なのですが、我々の頃は制度自体がそもそもあまり固まっておらず、やりたい放題、言いたい放題、好き勝手やっていたわけです。当然先輩方もいない訳で、未開の荒野を自らの鉞を背

負って歩くと言うような感じでいろいろやってきました。ところが今、その当時の同期生が何をやっているのかと考えると、そう言えばクラスが違っていると、そもそも誰がいたのか、たとえ面識のある人であっても、今何やっているのかわからない。で、これだけ多様な人がいるのだったら、ひょっとしたら今それを知るだけでも面白いかもしれない、そう考えたわけでありまして、それは現役の皆様にもお役に立つと。

「総人・人環を出た我々が今どうなっているのか」、「我々が実際に総人・人環からどういうものを得たのか」、「何を期待していたのか」ということをレビューしてみるのも、総人・人環にとっても良いのではないのか等々、いろいろ考えまして、とにかく我々の情報共有や外部評価のような話もあわせて、とりあえずOBに話して貰いましょう、というところから話がスタートしました。

今回の企画の前提ということについていくつか話をさせて頂きたいと思っております。この同窓会の利害関係者についてですが、まずは総人・人環の卒業生を想定しています。この卒業生は当然国内だけでなく、海外からの留学生の方も含みますが、残念ながらフォローできているのは国内だけの、名簿で連絡先がちゃんとわかっていて連絡が取れる人だけ、それでも2200人位いらっしゃるそうなんですけれども、その人が主な対象になっています。次に総人・人環の大学生・院生の皆さんも将来の我々の仲間になるということで利害関係者として考えています。最後に名誉教授の方も含め

て、教員や職員など、先生方ということになります。その利害関係者の間での同窓会の役割を考えると、まずは我々卒業生同士の情報共有が考えられます。そして同窓生と学生、そして先生方との情報交換があります。今回の前提としては、これらの交流をイメージしています。

今回はお三方の経験を語って頂くので、主観的で個別事例にはなりますが、ねらいは、総人・人環の教育の成果を見ていただきたいな、そういうところにあります。後輩の学部生や人環の皆さんに総人・人環を卒業した後どんなことができるんだろうか、ということを知って頂きたいな、と。そしてそのためには今何をすべきか、ということを考えて頂ければいいかと思います。先生方には、昔こうだった学生がこうなるんだ、と思いついて出して頂いて、是非後進の教育に役立ててもらいたいと考えております。



今回お話頂く内容としては、いくつか共通のテーマというのをこちらで設定させて頂いております。まずは自己紹介。次に最近の活動について何をしているのか。そして、卒業後の人生と総人・人環、まあ、ポジティブな話、ネガティブな話、両方あると思うんですけども、それらについてお話下さいとお願いしてあります。その他にも、大学時代は何をしていたのか、先生や大学に何を求めていたのか、それが人生にどのように影響を与えたのか、それから、今後の総人・人環に期待

すること、こういうふうなお題で今日はお話をお願いしてあります。最後に事前に資料を頂いておりますので、私の方で僭越ながらまとめさせて頂いたものがありますので、それを用いて、今日の企画についてまとめさせて頂きます（13頁参照）。

株式会社野村総合研究所勤務
（うえむら てつじ）

「総人」という壮大な社会実験を成功させるために

木南 陽介



まず初めに、これまでの経緯をかいつまんでお話ししますと、在学中は、総合人間学部人間学科に所属していました。1996年に仲間とともに有限会社メディア

マックスジャパンを創立・経営し、企業のシステム開発を実施しました。卒業後は、外資系コンサルティング会社マッキンゼー・アンド・カンパニーで大企業の戦略コンサルティングをするなか、2000年5月30日の「ごみゼロの日」に「環境をもっと新しく」しようということで、「リサイクルワン」を同僚と2人で創業しました。現在では、国内最大の再生資源の取引市場（1500社加盟）を運営し、再生資源のマッチング、環境対策サービス、リサイクル事業構築支援などを行っています（リサイクルワン公式サイト <http://www.recycle1.com/>）。

入学当初は、京大軽音でバンド活動をしていました。友人3人で共同生活をし、朝までお酒を飲み語る毎日を送っていました。授業はそこそこまじめに出ていたはずですが、あまりおもしろいゼミはなかったように思います。3回生のときにバックパッカーで中国～パキスタンを50日間の旅をし、「風の谷のナウシカ」の舞台ともなった8000m峰ナンガ・パルパットに感動したことが記憶に残っています。その後、インターネットプロバイダーのベンチャー企業で経営企画のアルバイトをし、商売というものを知りました。それを機に友人9名で会社を創ったのですが、学生の企

業ということで限界もあり、同時に社会の厳しさも知ることとなりました。

在学中の勉強は「環境」がテーマでした。主専攻は社会システム論、副専攻は物質環境論をとり、主専攻では「なぜ環境問題は起こるのか」をテーマに環境訴訟、環境保全制度（環境税やリサイクル法）、環境NGOなどについて勉強し、副専攻では、「地球の耐性」について勉強しました。副専攻で海中のCO₂吸収のメカニズムなど、自然の対応力を研究したことが、のちのリサイクルワン創業のきっかけになりました。

私が総人という場所をいかに活用したのだろうか、と考えてみますと、まずは文系・理系の学生が両方いて、学生でも会社が作れたことがあげられます。つまりプログラマーと営業マンが同時にいるわけです。また、私のテーマである環境問題の総合的な勉強ができたこともあげられるでしょう。環境法や環境経済、エントロピーの法則、CO₂、環境×ITなど、一応サワリ程度ですが学習は可能でした。また卒業後には、OB同士の交流によって、転職や企業提携などのつながりができています。総人生は少数だけれども、いろいろな世界に人が行っているのだなと実感しました。



社会に出た身としては、大学はまさに自由でいいところだと思います。しかし目標を持たないと、あまりにも長く退屈です。逆に、仮にでも目標を持つと、急に時間がないことに気づきます。友人との議論や勉強においても、あるテーマについて深く掘り込んで討議し続けることが重要だと思います。

私一個人がオススメするのは、まず何か社会的意義のあることに、チャレンジしてみても、ということ。かつそれが「新し」ければ、なおグーです。問題解決という視点に立てば、総人の特色である文系・理系両面の視点が役に立ちます。そうすると幅広い教授陣・友人が生きてくるようになるでしょう。大学だけに閉じないコミュニケーションも必要です。それは社会人であり、外国人であり、そして異性もそうです。そういった異なる人間とのふれあいによって人間の幅は広がっていくものです。そして、読書や音楽、映画、旅行、スポーツなど、とにかく「情報」に触れ、多くのことを体験してってください。人生の豊かさとは、すなわち心の豊かさです。これを若いうちから鍛えると楽しいでしょう。

今度はビジネスの世界という視点から「学部」を見てみますと、日本の大学は、学生に不親切だろうと感じます。まずは勉強の動機を教えてください。ということがいえるでしょう。まずはスキルから、というスキル先行が多いですが、例えばそ

のスキルがいらなかったらどうなるのでしょうか。何らかの目標を設定した後に、スキルを身につけるようにすべきだと思います。基礎のない応用学習は……。また応用を見ない基礎学習のみは……。というところ。最初から研究者を目指すというのではない一般人としては、早く社会に出て、動機を得てから学習をするとよいのかもしれませんが。私の実感として、少なくともビジネスの世界の方が、物事の証明はうまい。そういう世界に一旦でたほうが、方向性があり、実行力が身につくでしょう。また、大学自身の特長として、純粋に「知る」ことの喜びをもっと知らしめる必要もあると思います。

総人は、壮大な社会実験だと思います。社会に効果が出るのは、30年後のことでしょう。日本社会の新しい学習・研究モデルを模索するこの実験をぜひ成功させましょう。そのためには、総人生ががんばらなければなりません。また卒業生の活躍にも、期待です。

株式会社リサイクルワン代表取締役
(きみなみ ようすけ)



自由な学びの場としての「総人」を活かせ

城井 崇



さて、私の肩書きは「前衆議院議員」です。なんだか偉そうですが、「前」がついているのだから、ただの人なのです。わたしのやっていることを紹介すると、議員時代は、大学のポ

ストク問題や安全保障政策を中心に取り組んでおりました。現在はNPOなどで社会のために頑張っております。

在学中は研究、サークル、バイト、熊野寮に明け暮れた4年間でした。サークルは、京都大学舞踏研究会に1年間。その後、京都大学国際関係論研究会へ。友人とインカレサークルの立ち上げも行いました。バイトは、家庭教師をメインにしていました。仕送りがなかったのと、書籍代（と飲み代）を確保するため。阪神淡路大震災の復興現場でガードマンをやったこともあります。熊野寮での日々の飲み会は、自らの政治信条を築き上げるきっかけとなったかもしれません。

主専攻は人間学科の社会システム論専攻でした。中西輝政、西井正弘両教授に食らいついた4年間。西井先生には「君にはリーガルマインドがない」といわれたこともありますが、大学で国際政治を学んだことは、衆議院議員（文部科学委員会委員）として、大学改革（ポストク問題など）や日本外交、安全保障（民主党の安全保障政策立案や米軍基地問題など）などを国会で議論するにあたって大きな役割を果たしたと思います。

副専攻は国際文化学科のアメリカ政治文化論。動機は国際社会でアメリカと対峙してやっていく策を練るため。最も印象に残ったゼミは島田先生の「ペーブルースが果たしたアメリカ移民への役割」。これは衆議院議員として働いた際も、対米政策を検討する際の素地としてある程度役立ちました。副専攻の必要性について考えてみると、私の場合、国政を担う立場では、政策立案時など、少し関連もありましたが、研究者ではない世界では極めてまれでしょう。

私が在学していたのは学部開設後数年という状況で、主専攻と副専攻を関連付けて研究を進めるには、船も、海図も、天気図もありませんでした。教授の方々は、ご自身の分野をすでにお持ちで、同様の取り組みをされている指導者がいなければ、結局学生自身が研究自体をイチから組み立てていかざるを得ない状況。数年間の聞きかじりではほとんど意味がなく、中間領域・学際分野を本気で学問として確立しようとするならば、6年間（修士まで）一貫した計画を持って臨む必要があると思いました。

私は、京大にヒトクセある良き仲間との出会い、一風変わった先生方との出会い、京大の学風のもと、国際関係を学べる場を求めてきました。卒業してみて、個性たっぷりの仲間と先生がたしかにいたし、仲間との語り・議論（講義やゼミよりも放課後の研究室や居酒屋でのそれ）で培われた感覚は、今でも世の中（特に政治の世界）をわたっていくときの基礎基本となっています。学生に対しては、もっとほったらかしでもいいのではない

かと思います。4年間「成績上」まじめにやっていたからといって、たいした役には立たない。人としての「地金」をいかに鍛えたかが重要になると思います。

さて卒業後のことですが、在学中は分野を絞らず、あらゆる分野の説明会へ赴き、OB訪問を繰り返しました。ただし、総人のOBは当時まったくないので、他の学部出身OBに助けられました。最終的に、大学院進学、シンクタンクの二択で悩み、結果的には、現地現場主義に徹する松下政経塾へと身を投じました。

「そろそろけつをまくりなさい」卒業論文を指導していただいた中西輝政教授から言われた一言が胸に突き刺さり、政治家への道を歩むことを決断。政治家を目指す決断にあたっては、人環の博士課程に当時在籍していた社会人研究者にも相当に相談に乗ってもらいました。

総人とは偉大なる実験場。卒業後もいまだ道半ば。新規開拓力のある人材を育てるにはうってつけの場だと思います。分野縦割りで構成されている他の学部とは根本的に異なります。安心できるもの（歴史や実績のある肩書など）が欲しいなら他をあたったほうがいいでしょう。学部段階で分野を横断する研究の機会をくれるところはまずないので大変貴重ですし、中間領域や学際分野のパ



イオニアを生み出す可能性もあります。変なやつを4年間ほったらかしにして「新種」、「変種」が生まれるのをしっかり見守り続けて欲しいです。

私に多くの気づきをくれた「総人」に

ただただ感謝。自由な学び場である京都大学と総合人間学部をこれからもしっかりと守っていくために、政治の現場で全力を尽くします。みなさん、いっしょにがんばりましょう！

民主党・前衆議院議員

(きい たかし)

城井崇公式ウェブ <http://www.kiitaka.net>

「何でもあり！」が面白い

村上 正行



光栄にも同窓会企画の「卒業生が語る総人・人環の活かし方」というシンポジウムでお話する機会をいただきました。隣に並ぶ同窓生を「こりゃすごいなあ」と、すっかり他人ごとのように眺めて

いました。Webに載った写真を見ても、それぞれの特徴があって興味深いです。総合人間学部を卒業して、もう10年になろうとしています。はやいなあ、というのが実感ですが、まさか自分が広報に原稿を書くことになるとは、10年前には思いもよりませんでした。

私はOBの中でも研究者という立場で呼ばれましたので、まず、今自分がやっていることを書きたいと思います。私の専門は教育工学で、ICT（Information Communication Technology）を活用した高等教育実践をフィールドにして、実践の設計・評価の研究を行っています。質問紙調査による定量的な評価を主にしながら、インタビュー調査などによる質的研究を組み合わせて評価研究を行っています。自身のスタンスとしては、情報系と教育系の間隔的な立ち位置で研究を進めたいと考えています。

博士課程からは大学院情報学研究科に移ったのですが、2つの組織でお世話になりながら、研究を進めていました。所属していた学術情報メディアセンター（当時、総合情報メディアセンター）の美濃研究室（人環の前にある建物ですね）では、

TIDE Projectという京大-UCLAの遠隔講義の評価研究を行いました。分析の結果、臨場感が満足度に大きく影響すること、受講経験が増加していけば満足度に影響を与える要因がシステムの性能から授業内容へと移行していくこと、文化の違いによって重視する評価要因が異なること、などが明らかになりました。

高等教育研究開発推進センター（当時、高等教育教授システム開発センター）では、京大と慶應義塾大学との遠隔ゼミの実践に関わりました。この実践では、それぞれの大学でのゼミ、Web掲示板による議論、合同合宿という3つの環境を組み合わせて場を提供することによって、自己探索や自己形成をしてもらうことを目的に設計しました。結果として、Web掲示板によるオンラインと合同合宿によるオフラインという2種類のコミュニケーションにより、2集団間の関係の変化を体験することが出来、この変化の過程の中で学びの手がかりを得ることが可能になったことが分かりました。

このような遠隔教育実践やe-Learningを考えると、対面授業との関係、“遠隔”であることの意味を考える必要があります。独立行政法人メディア教育開発センターの吉田文教授は「遠隔授業を教室の授業に近づけ



研究室のOB合宿にて

るだけでは、遠隔授業はいつまでも代替としての意味しか持たない。そうだとすると、教室の授業のオンライン化というのは、わざわざ質の劣るものを生み出す作業にしかならないことになる」と述べています。遠隔授業が技術の発展によって対面授業に近づいていくことそのものには価値はありますが、遠隔であることの特性を見出さなければ、遠隔授業の価値は対面授業より劣ってしまうという視点です。

遠隔教育を考える際には、「遠隔ならでは」の授業を設計することが重要であると考えます。すなわち、2つの現実空間をICTによって結ぶことによって対面授業とは異なる新たな学びの場を構成し、その場において学生が主体的な活動ができるようにしていく必要があります。

このように遠隔教育やe-Learningを考える時には、ICTの発展、授業設計の2つの側面から考える必要があると考えています。複数の視点からアプローチしていくという手法は、総合人間学部らしいのではないかな、と思っています。他にも、システム評価や教授法に関する評価、教授内容と受講生の視線との関係、講義アーカイブに関する研究、撮影されることによる影響、教育効果など、さまざまな側面から評価しようと試みています。

現在は、京都外国語大学で、マルチメディア教育研究センターという組織に所属して、情報環境の構築のお手伝いをしながら、いくつかのプロジェクトに関わっています。英語ともう1言語をチームティーチングで指導する、マルチリンガルCALLを検討・評価したり、「京都研究プロジェクト」として外国人向けの京都の観光情報を7言語で発信するシステムの開発に携わっています。両取組ともGP (Good Practice) という競争的資金をいただいて活動しています(最近、大学は競争的資金が多くて、作文ばかり書いているような気はしますが)。京都外国語大学には、理系出

身の教員が私しかおらず、最初はかなりとまどいましたが、こちら学部時代にいろんな分野の人たちと交流していたからか、今ではすっかりなじんでいます。とはいえ、いろんな仕事が降ってきますが。

さて、在学中の話をしなないといけませんね。主専攻は数理情報論、副専攻は人間関係論でした。実のところ、学部生時代は吉田コートで朝から晩までソフトテニスの毎日でした。冬でも真っ黒な顔をして、テストを受けるのもウインドブレーカーを着て、というあまりほめられた学生ではなかったと思います。

ただ、入学当時から教育とICTの関係に興味を持っていたので、いろいろ勉強してみました。情報科学やプログラミング、数学基礎論、教育心理、教育方法などなど。当時は教育工学という分野がまだ新しかったし、京大にはない分野(今でもあまり盛んとは言えないでしょう)だったので、自分で勉強するしかなかったのです。

そのような状況の中でしたが、学部、修士時代の指導教官である高崎先生には、畑違いの分野にもかかわらず、不出来な私を熱心に指導していただきました。週1回のゼミでは有益なコメントをいただき、論文の添削も丁寧にしていただきました。また、研究者、数学者とはこういうものなのだ、というロールモデルも、この時代に形成されたと思います。

ですが、みんなに言われたことは「4年間パンキョーか」「なにしてるか分からんなあ」でした。総人生の宿命ですね(今ではもうそんなことはないかもしれませんが)。そんな質問には、「そうなのよ」とのりつつも、「でも、好きなことができて、おもしろい」と返していたような気がします。今、振り返ると総人生活を楽しんでいたのかもしれないですね。

総人で一番よかったのはいろんな分野に関心の

ある同級生がいたことや、夜に集まって酒を酌み交わしながら、みんなの興味のある話をしたり、自主ゼミをやってみたりできたことです。これが大学の醍醐味だ！と思っていました。このような経験によって、自分でやろうという気持ちが出てようになったし、総人にいたからこそ、教育工学という境界領域の分野で今もやっていけるのだと思います。京大で教育工学を専門にしている人はあまりいないので、他の分野の仲間と話をしたり、いろんな学会や研究会に参加したり、いろんな本を読んだりということは総人にいたころとそんなに変わりありません。

また、就職における総人・人環のメリットを考えてみれば、企業や大学に就職すれば自分の専門分野以外のことをすることがほとんどでしょうし、学士・修士・博士でもいろんな分野のことを知り、対応できる能力というのはとても重要だと思います。その能力を養うには総人・人環は最適かもしれません。

メリットばかり書いてきましたが、総合人間学部で苦勞したこと、改善してほしいことを書いておきたいと思います。当時、不満に思っていたのは、予備校などに配られるパンフレットには「何でもできる」ようなことを書いていながら、それほど対応できていなかったということです。今はどうかよく分かりませんが、当時は異分野共同プロジェクトなどもなかったですし、もっと総合人間学部の特徴を活かした試みがあると面白いなあ、



卒業式

(数理情報論の5名で基礎科学科事務室にて)

と思います。学生同士はいろいろ交流していたので、うまく場を設定できればす

ごいことが

できるのではないかな、と(もちろん、過度な期待もあります)。また、1期生ということもあったのですが、研究室が自由に使えなかったのが悲しかったし、大変でした。8月



韓国にて

くらいからようやく演習室が開放されたような気がします。学生がもっと自由に学べるような環境づくりを進めていってほしいと思います。

最後に、これからの総合人間学部に期待することですが、いろんなことを勉強できる環境であってほしいし、教員もリソースとして、どんどん活用していく学生が育ってほしいと思います。いろんなものを許容して行って「何でもあり！」であってほしいですね。今、高等教育に関わる研究もしていますが、大学教員のあり方も変わりつつあります。いや、変わらないといけない、と思います。総合人間学部のような、新しい理念を持って設立された学部が、学生、教員、職員一体となって、従来の常識にとらわれない新しいことにどんどん挑戦すべきだと思いますし、そのような取り組みを続けていくことで京大の中で、日本で、そして世界での存在価値をアピールできるのではないかな、と思います。

学生の皆さん、ぜひ面白いこと、新しいことに挑戦してください！

京都外国語大学
マルチメディア教育研究センター専任講師

(むらかみ まさゆき)

同窓会フォーラムを終えて

植村 哲士

三人の方の話をお聞きしましたが、お三方とも総人・人環は、「壮大な社会実験である」というニュアンスの言葉を使っていました。城井さんは「偉大なる実験場」、「もともと実験的な意味合いの強い学び場であり、つぶしはきかないと心得るべし」、「『手当たり次第にがむしゃらに学ぶ』を保証してくれる数少ない学び場」と。木南さんは、「総人は、壮大な社会実験である」、「社会に効果が出るのは、30年後」「日本社会の新しい学習・研究モデルの模索」と。それらをまとめますと、総人・人環という場所は Try & Error を思う存分できる場所であり、社会に出てから必要な「自分の足で歩く」良い練習機会を提供している場所だといえます。

講演者が総人・人環からどのような影響を受けたのかをみますと、実は「何かこれ」というものではなく、「多様な分野(考え方)の存在の認知」や「勉強法」など、一般的なことだったのが見えてきます。城井さんは「物事に深く深くのめりこんでいける仲間と先生とのご縁」、「専門的な研究に関する基礎知識」、「いろんなものの存在を感じ取り、認めることができるアンテナ(価値観)を磨くことが大切、と気付かせてくれたきっかけ」と指摘されていますし、村上さんは「自分でやろうという気持ちを与えてくれた」、「総人にいたからこそ、境界領域の分野で研究を続けていられる」とおっしゃっています。木南さんは「文系・理系を両方見て、一応環境問題の総合的な勉強ができた」、「専門分野にロックインされなかった」と。

以上まとめますと、総人・人環が講演者に与えたものとは、自主自立の精神の涵養や多様な存在

への気付きや学際的な思考の育成だったように思われます。

総人・人環に今後期待することでは、熱いメッセージが飛びました。村上さんは「『何でもあり!』であってほしい」、城井さんは「中間領域、学際分野のパイオニアを生み出す」、「未来のアルビントフラーは総人から生まれる」、「改革の旗手となる人材を生み出す」、木南さんは「ぜひこの実験を成功させましょう。そのためには、総人生ががんばらなければなりませんね。また卒業生の活躍にも、期待です」とおっしゃっています。

最後に、このようなお三方の話を受けて、総人・人環の外部評価のようなものを考えてみます。もともとの総合人間学部の目的が、「21世紀の社会に対して、持続的かつ創造的に対処しうる広い視野を持った人材の育成」であったことを考えますと、卒業生の総人・人環から受けた影響は「自主自立の精神の涵養」、「多様な存在への気付き」、「学際的な思考の育成」などであったことから、当初の教育目的は、本日の講演者に関しては達成されているようです。そしてやはり、総人の教育効果を生み出す鍵は「学生の自主性」であり、「学生時代の試行錯誤が重要なきっかけ」となるのは間違いなさそうです。

今回のフォーラムの資料は同窓会のホームページにUPされています。ご意見・ご感想等をお待ちしております。同窓会フォーラムにご協力いただき、ありがとうございました。

株式会社野村総合研究所勤務
(うえむら てつじ)

閉会の挨拶

総合人間学部長 人間・環境学研究科長

富田 博之



植村さんのスライドの隅にある胸像、3・4期生までの人しか知らないでしょうが、これぞ本物の折田先生、来週から学内某所に再登場される予定です。湯川・朝永両ノーベル賞博士の生誕100年

を記念して博物館で展示が催されますが、サテライトとして、両博士が学ばれた旧制第三高等学校の資料が、時計台記念館に展示される予定になっています。折田先生はまさにこの吉田南キャンパスの象徴——いい意味であってほしいのですが——でして、毎年、看板に書かれていたように、旧制第三高等学校の自由の伝統を築かれた初代校長であります。そのよき自由の学風の伝統を引き継いでいるのが、我が総合人間学部と人間・環境学研究科です。

まず、講演をしていただいた卒業生の皆さんには、貴重なお話を提供して頂き、心からお礼申し上げます。それぞれの方が「辛口」と言いつつも、総合人間学部と人間・環境学研究科の良い面を強調していただきましたが、正直なところ我々教員自身が、まだ学部と研究科の目指すところ、どういった学生さんを育てるかということに確信を持っておらず、未だに、やはりまず専門性をたたき込むべきではないかとか、右往左往している段階です。その意味でも、今日のお話は我々教員にとっ

てたいへん有意義な、耳の痛いお話でした。皆さん異口同音に「壮大なる社会実験」とおっしゃったわけですが、人体実験をやっているのかと思うと、身の震える思いでした。

この水曜・木曜と、国立大学新構想学部代表者会議というのがありまして、東京まで行ってまいりました。2日目の午後は空きましたので、一期生の元女子学生さんと会う機会があり、今日の話も紹介しましたら大変懐かしがっていました。

この会議は、総合人間学部が設立された翌年に、私たちが提唱して第一回目を主催したものです。新構想学部とはいえ、総合人間学部ができる前に既にできていた東京大学教養学部や広島大学総合科学部も含まれています。この2つは、総合人間学部に変えてよく似たところがあります。

東京大学教養学部は、新制大学の発足と同時にできており大変な老舗なんですけど、ご存じのように、東京大学に入学した学生の全員が2年間は教養部に所属し、3年になるときに各学部に分けられて進学する、その中の一つに専門課程としての教養学部があります。広島大学の方が、総合人間学部と制度が似ていまして、学生定員は130人、教員が127人と、規模の面でも非常に近いのですが、すでに設立後30年を迎えています。

総合人間学部を設立したときにも、この2つの学部を参考にしましたが、古典的な意味での単な

る教養学や、専門科学の寄せ集めであってはならない、新しい時代を切り開く総合知の力、パイオニアの気概を備えた人材を育成するという理想を掲げて出発しました。広島大学の方は、学部の創設は早かったのですが、大学院は昨年ようやく完成され、その際には人間・環境学研究科の構造を大いに参考にされたということです。

このようにお互いに刺激しあい、互いの良い面を取り入れる改革を重ねているわけでした、広島大学では、昨年30周年記念事業を行われたときに、総合科学部の理念として「越境アドベンチャー」というキャッチコピーを創案されました。あそこは、こういう宣伝が大変上手で熱心な大学です。「越境」というのは、「ボーダーレス」ではなく「トランスボーダー」、積極的に意識的にボーダーを超えよということですね。ボーダーを超えようというときには、ボーダーが見えていないといけない。在学生の皆さんには、単なるボーダーレスではなく、まず自分の確固たる足場を固め、その上でボーダーを見極めてそれをどんどん越境して欲しいと思います。学部教務委員長の西井先生にも参加して頂いていましたので、こうしたいろんな大学の良い面を、これからのカリキュラム改革に積極的に取り入れて行きたいと思っています。

今日参加された在学生のみなさん、どうか先輩達の活躍を目のあたりにして、これを大いなる刺激にし、自分の進むべき方向を探り続けていただきたいと思います。

本日は、ほんとうに有意義な時間をもてたと思います。同窓会設立後1年もたたない時点で、こういう会を催していただけるとは、予想もしていませんでした。世話人の方々に深くお礼申し上げます。

ます。

どうかこれからも同窓会の早期確立を、ぜひお願いいたします。学部・研究科の教育研究を支援するような基金までは、正直なところ、まだ期待しておりません。まずは人とネットワークの確立を急いでいただきたいと思います。

本日はほんとうにありがとうございました。

(2006年9月30日 閉会の挨拶より)

(とみた ひろゆき)

人間・環境学研究科
総合人間学部

広報委員会